

トランスジェンダーの親の当事者理解と関係性構築に関する研究

——当事者家族へのインタビューを通じて——

首都大学東京大学院 石井由香理

1 目的

本研究は、トランスジェンダーの子をもつ親を対象とし、かれらの当事者理解と関係性の構築について考察するものである。現代において、親子の間には強い情緒的関係性が築かれるようになり、そのため、「親」は、しばしば当事者にとって、最も重要な「他者」である。その親が、子のカミングアウトをどのように受け止め、子への認識をどのように変化させていったかを理解することによって、翻って、差異化・多様化が起こる現代のトランスジェンダー（石井 2012）を巡る、多様な性を巡る言説構造について考察を深めることを目的とする。

2 分析対象／方法

前述の通り、分析の対象とするのは、トランスジェンダーの子をもつ 40～60 代の親 5 名である。5 名はそれぞれ、東京、兵庫、福岡またはその近郊在住である。分析の際には、2012 年から 2013 年にかけて実施された半構造化面接法によって得られたデータを使用し、それぞれの対象者の発言を比較する。また、全員が、同じ会に所属しており、この会は、LGBT に関して国内で最も有力な straight ally の会である。そのため、かれらを考察することで、トランスジェンダーの子をもつ親の先進的な像の考察が可能であることを付記しておく。

3 結果

対象者たちは、非常に大きな驚きをもって、子のカミングアウトを聞かされていた。その後、親たちは、「子が性同一性障害であること」を理解し、受容し、関係性を構築し直すことを目的とした作業を行なう。その作業は、言い換えれば次の 3 点を行なうことである。1 つは、子と接するなかで、子の望む生き方とはどのようなもので、何が適切な接し方なのかを時間をかけて探ることであり、2 つ目は、文献や当事者コミュニティを通じて学ぶことであり、3 つ目は子についてのナラティブを語り直すことである。

まず、対象者たちは、子に接する中で、子の反応を通じて、自らの言動がかれらにとって適切なものであるかを再帰的に見つめ直す。また、カミングアウト後に、ジェンダーやセクシュアリティについての文献や当事者コミュニティとの関わりから、自分の子に起こっていることは何かを理解し、またセクシュアル・マイノリティあるいはその周囲の人々（研究者、医療者、宗教など）と思想を共有していく。そうした理解はやがて、子についてのナラティブの語り直しを可能にする。カミングアウトによって断絶された、「この子は何者か」という問題を乗り越え、「子と自分との関係性」に再び連続性をもたらすために、対象者は語りを修正する。特筆すべきは、対象者たちが、子あるいは文献や当事者コミュニティから、多様な性についての情報を得ており、そこから、自らの子のはっきりしたジェンダー・アイデンティティを持つ「典型的な当事者」なのかそうでないかを把握し、そうでない場合、子の育成過程におけるかれらの性の曖昧さ（独自性）を証明するエピソードを語った点である。

上述の考察は、性に関する言説に親たちが触れ、さらに発信者となっていく過程での、親たちの視点を浮かび上がらせるものであり、多様な性に関する言説構造を考える際の一助となると考える。

文献

石井由香理, 「カテゴリーとのずれを含む自己像——性別に違和感を覚える人々の語りを事例として——」『社会学評論』 63(1), pp106-123, 2012.